

不正行為による巻き添え被害

Collateral damage

2010年8月26日号 Vol. 466 (1023)

ハーバード大学の進化生物学・心理学の著名教授による科学的不正行為が衝撃を与えている。大学による調査概要は出たが、不正行為に無関係と思われる研究室員などへの影響は深刻だ。

8月20日に科学的不正行為が公表された進化心理学者 Marc Hauser の暗澹たる話には、ただ1点、救いがあるかもしれない。それは、Hauser 教授のデータ解釈方法に対する懸念を大学側に通告した若手研究者の勇気だ。

Hauser 教授はこの分野のスター研究者で、有名知識人だ。同教授のハーバード大学（米国マサチューセッツ州ケンブリッジ）の研究室に所属する研究員が、このような手強い人物を相手に苦情を申し立てることは、自らの職業生命を大きな危険にさらすことを意味している。

大学院生やポスドクは、不正行為を目撃する最適な位置にあることが多い。ところが、彼らのキャリアは、こうした不正行為の巻き添え被害に最も弱く、特に彼らのメンターが不正行為を行った場合はなおさらだ。若手研究者の評判は、その指導教官の成功と失敗に緊密に結びついており、指導教官が不正行為で非難されれば、その弟子にも疑いの目が向けられることがある。

Hauser 教授の手を経た数多くの卒業生やポスドクの先行きも不透明なものとなった。別の研究室に移らざるを得なくなった者も出ている。大学教員の応募資格のある者は、現在の地位を採用委員会にどのように説明すべきか悩んでいる。ハーバード大学での3年間の調査を率直に話すべきなのだろうか。また、新任教員となり、研究助成金を申請しようとしている者にも心配の種がある。Hauser 教授と共同発表した研

究論文については、どのように記載すべきなのだろうか。Hauser 教授との共著論文は、いつごろ、論文誌に投稿するのが無難なのだろうか。不正行為事件があると、ほとんどいつでも、こうしたジレンマが、表に出ない形で繰り返される。

Hauser 教授の調査に関する初めての報告書が8月中旬に発表されて以降、ハーバード大学は、調査結果の公表を拒否しているが、こうした若手研究者に対する圧力は高まる一方だ。大学側は、同教授以外の研究者やほかの研究論文が、この事件に関与しているのかどうかについて何も語っていない。

幸いにも、沈黙は続かなかつた。8月20日、ハーバード大学が、内部調査による結論の概要を公表したのだ。Hauser 教授は非ヒト霊長類の行動観察結果とヒトの重要特性（例えば道徳性）の進化の結びつきを研究してきたが、内部調査は、データの取り扱いと結果の報告に問題があったと認定した。この大学側の声明では、8件の不正行為について Hauser 教授にのみ責任があることが強調されており、発覚した不正行為の関係する論文はわずか3本だった。

ハーバード大学が調査内容を公表しないため、マスメディアで激しく批判されたが、大学側が不正行為の内部調査結果を公表しないのは一般的なことであり、時には必要なこととされる。これは、事件が複雑な場合（不正行為事件は複雑なことが多い）や、調査結果に異議申し立てがあった場合、ある

いは他の研究者の関与が認められる場合に、特に当てはまる。確かに米国研究公正局（ORI）は、国立衛生研究所の研究助成を受けた研究者の調査を監視し、研究機関に対して、ORI 独自の評価が完了するまで調査結果を公表しないように要請している。これにより、事件に対する判断が、大学による独自調査の終了から数週間あるいは数年遅れることがある。

公表しないことには、実際的な理由もある。ORI が聴聞会を開催する必要がある場合には、証人となる可能性のある人物が、聴聞会以前に調査結果を知ってしまうと、それに影響を受けて証言するおそれがあり、ORI は、それを避けたいのだ。

今回の事件では、研究者と報道機関から2週間にわたって圧力を受けた後、ハーバード大学は、予定を前倒しして、内部調査の要点を発表したが、その判断は正しかった。この大学側の動きは、Hauser 研究室の若手研究員の負担を完全に取り除くものではないが、同教授の不正行為の全容が明らかになるまでの間の負担を軽くできるかもしれない。

こうした負担軽減は、若手研究者に対する褒賞として歓迎すべきだ。今や Hauser 研究室では、動物の行動だけでなく、人間の行動についても疑問符がついてしまったが、この研究室の若手研究者の行動は、真の科学者が取るべき行動に値するものだった。

（翻訳：菊川要）